metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by
provided by Kwansei Gakuin University R

成人期女性の友人関係におけるヤマアラシ・ジレンマの特徴

How does the female of the adulthood hold the porcupine dilemma to her friends?

藤　井　恭　子 *

Abstract

This study investigated the trait known as the 'porcupine dilemma' with regard to adult friendships among women ranging in age from their thirties to their fifties. No developmental change was found regarding these adult female friendships. Cluster analysis revealed that, regardless of age, three types of dilemma behavior could be distinguished. The group accounting for the largest percentage of adult females, the dilemma group repelling others in all directions, possesses low self-esteem and finds it difficult to maintain a moderate distance in its relationship with 'mama-tomos' [friendships with other mothers derived from one's child's school]. The second dilemma group, displaying non-dilemma behavior through approach towards others, independently chooses friends outside the 'mama-tomo' circle, with a strong tendency to approach the other person in an uncomplicated manner. The third dilemma group, exhibiting non-dilemma distancing behavior, possesses high self-esteem and rarely feels tied to a relationship with a friend.

キーワード：ヤマアラシ・ジレンマ、成人期、女性、友人関係、ママ友

問題と目的

これまで日本で行われてきた友人関係研究の中心的な関心は、幼児期から青年期までの社会性の発達や現代青年性にあった。たとえばErikson（1959）の漸成発達理論では、青年期の心理社会的危機として「アイデンティティの達成 対 拡散」が設定されている。このアイデンティティの模索の過程では、親からの自立と仲間との友情が極めて重要な意味を持つ。その代表的な理論がAusubel（1954）の「脱衛星化・再衛星化」の考え方であろう。他にも、岩永（1991）やBlieszner（1994）らは、青年期における親密な友人関係・親友関係が青年の自己概念に大きな影響を与えることを指摘した。またWaterman（1993）は、「青年期において重要な他者（significant others）が青年の人生の選択の幅を広げ、アイデンティティ探求の際の積極的関与（commitment）に、より重要な意味づけを与える」として、青年期の友人関係はアイデンティティ形成に重要な役割を果たすことを指摘している。

その一方で、先に述べたような友人関係の発達的意義に照らして、現代青年の友人関係の希薄化を指摘する言説が1980年代半ばから、心理学のみならず、社会学、精神医学など他の領域からも、みられるようになってきた（千石，1985；栗原，1989；大平，1995；上野ら，1994；岡田，1995など）。こうした現代青年性は、適度な心理的距離をめぐって生じる力動においてもみられる。Shopenhauer（1851）の寓話をもとに心理学において概念化された「ヤマアラシ・ジレンマ」という心性は、本来、実際に近づきあい離れあいするなかで、適度な心理的距離を求めて揺れ動くジレンマであった。ところが現代青年のヤマアラシ・ジレンマは、藤井（2001）によって「近づきたい－近づきすぎたくない」「離れたい－離れすぎたくない」という、より内的な適度さを基準として生じるジレンマに変容していることが指摘された。深入りしないことを鉄則とする現代青年の友人関係においては、実際に近づいて傷つきあったり、離れて寂しい思いをしたりするのではなく、それを予期して生じる個人の内的な力動として経験されていた。しかし、こうした他者との心理的距離に対する敏感さは、青年期、とくに現代青年

* Kyoko FUJII　教育学部教授（生涯発達心理学）

のみの特徴として捉えることが妥当なのであろうか。

多くの生涯発達理論において、成人期以降の対人関係の中心は夫婦関係・親子関係へと移行するとされることが多い。Erikson（1959）の漸成発達理論においても、成人期前期の心理社会的危機は「親密性 対 孤立」とされており、その主たる対象は異性関係（夫婦関係）である。続く成人期後期の心理社会的危機である「世代性 対 自己陶酔」では、子どもや後進など次世代の育成や、後世のための働きがテーマとなっている。このように、成人期の発達においては異性関係や親子関係が重視される一方で、友人関係については、それほど多くの研究が蓄積されてきたわけではない。成人期において、友人関係がどのように構築・維持され、同時に悩みを抱えるかという観点については、あまり大きな関心を持たれてこなかったといえよう。だが、Vaillant（1977）の「第2の青年期」という表現にふさわしく、成人期は身体的、社会的、心理的に変化が大きく、アイデンティティの再構築が行われる時期でもある。特に現代の女性は30代以降に子育てや仕事の継続・中断・再開についての悩みや葛藤を抱えることが多い。その乗り越えには、家族・パートナー以外にも、同世代の同性友人が果たす役割も大きいと考えられる。

しかし青年期と異なり成人期には、ライフコースの違いによって生まれた生活環境の差異が、友人関係の構築に影響を及ぼす。成人期の女性は仕事や子どもの有無などの生活環境の違いが、話題の共通性や時間の共有しやすさなどに直結するためである。結婚をせずに仕事を続ける女性と、専業主婦で子育てを中心に行う女性とでは、時間や話題の共有などが難しいため、同質感を求めて自分と似た環境に置かれている他者を選択し、関わりを持つことが多くなる。ただし、ライフコースの共通項が多い場合であっても、必ずしも安定した友人関係が構築されるわけではない。近年、成人期の、とくに女性においては、「子どもを通じて知り合った母親仲間（中尾・原田，2010）」、「母親同士の友人関係（荒牧・無藤，2008）」を意味する「ママ友」という存在に注目が集まるようになってきた。これについて宮木（2004）は「この時期の女性特有の特殊な対人関係」であるとし、母親自身の経験や環境のなかから主体的に選択され構築されてきた友人関係とは異なる特徴があると述べている。母親にとってママ友との繋がりは、直接的な育児支援や情報共有などの物理的な面や、感情の交流・安定などの情緒的な面において、重要なサポート源である。しかし、それと同時に、子どもを介した間接的な関係であるがゆえに、“子どものために”と気を遣い、葛藤が生じやすくなる（實川・砂上，2009）。具体的には、子育てという共通項がありながら、その仲間関係の中での自らの立ち位置や、距離感を間違えれば、自分と相手との関係だけでなく、子ども同士の関係にも影響を及ぼすという不安が強くなることなどが考えられる。あるいは、子ども同士は仲が良くても、母親同士はどうも同質感を感じにくく、関係が深まらないということもあるだろう。母親同士の関係と子ども同士の関係が並行的に交錯し、かつサポート源でありながら緊張やストレスの源でもあるという陰陽の両側面をもつという特殊性こそが、ママ友とそれ以外の友人関係との最大の違いであろう。

また、ママ友であるか否かに関わらず、たとえ同じ関係性であっても、積極的に受け止め適応している場合もあれば、消極的あるいは否定的にしか受け止められずに適応できていない場合もあるだろう。自尊感情が対人行動や対人関係を規定する要因となることは広く知られているが、自己否定が強い場合は、相手の顔色や相手との距離感に敏感になり、ジレンマを強めると考えられる。反対に、自尊感情が高い場合には、相手との心理的距離や揺れに対して過度に反応せず、安定した関係を構築しやすいと予想される。そこで本研究では、生活環境に関する外的変数に加え、自尊感情という内的変数についても検討を行う。これまでの先行研究では、成人期の自尊感情は20代以降ほぼ一定に高い水準で保たれており（松岡，2006）、とくに中年後期は他の年代群と比べて高い（若本・無藤，2004）ことが指摘されている。しかし一方で、成人中期においては、再び自己は否定的な様相を呈するという、いわゆる中年期危機（midlife crisis）説もある。Jung（1933）が「人生の正午」と呼んだ中年期の後には、人は身体的・心理的老化を迎え始め（Whitboune，2002）、自己の不完全さや有限性を受容し（Jacques, 1965）、残された時間の限界を意識する。これによって、人生の目標の再吟味（Gould，1978）、新しい生き方の模索（Vaillant, 1977；Levinson et al., 1978）を始める。こうした危機の中では、誰もが一定に高い水準で自

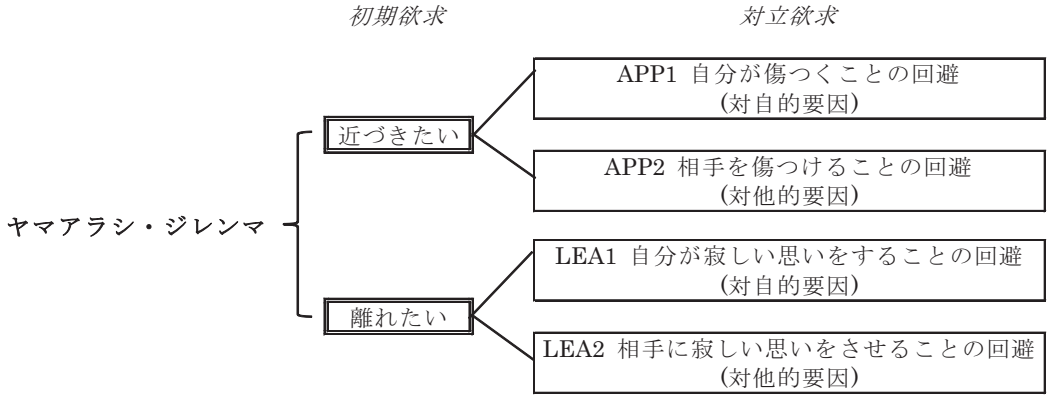

Figure 1　ヤマアラシ・ジレンマ尺度の構造

尊感情を保つことは容易ではない。そこには個人差があり、友人との間で引き起こされるヤマアラシ・ジレンマの程度にも影響を与えるのではないだろうか。

以上のことから、本研究では成人期の友人関係におけるヤマアラシ･ジレンマの特徴を明らかにする。そのため、次の３点について検討する。(1)成人期の女性の友人関係について、相手との適度な心理的距離をめぐって生じるヤマアラシ・ジレンマという視点から捉え、発達的変化がみられるか検討する。(2)ヤマアラシ･ジレンマの生じ方の違いによってジレンマのパターンを抽出する。(3)(2)で得られたパターンの特徴について、友人との関係性、生活環境の変数、自尊感情の側面から特徴を明らかにする。

方法

調査協力者　30～50歳までの女性208名（平均年齢45.44歳、SD＝7.98；30代59名、40代76名、50代73名）であった。

実施手続きと倫理的配慮　2011年７月～11月にA県にある自治体主催の子育て家庭支援関連の講演会や研修会において、終了後や休憩時間中に協力を依頼した。一斉に質問紙を配布し、その場で回収した。倫理的配慮として、調査は無記名であること、回答は任意であること、回答を拒否したり中断したりすることができること、拒否や中断の場合であっても調査協力者に不利益は生じないことなどを質問紙の表紙に明記し、なおかつ調査実施前に口頭でも説明を行った。

調査内容　①調査協力者自身の属性について問う５項目（年齢、性別、子どもの有無と年齢、職業の有無と勤務形態、生きがいの有無）。

②調査協力者にとって、普段の生活の中で会う時間や会話の量など、最もかかわりの多い同性の友人の属性を問う４項目（かかわりの多い同性の友人の有無、性別、仕事の有無と勤務形態、子どもの有無、友人との関係の種類（幼なじみ、学生時代からの友人、現在もしくはかつて職場が同じ、現在もしくはかつて家が近所、子どもを通じての友人・ママ友、その他から選択）。

③藤井（2001）によるヤマアラシ・ジレンマを測定する尺度の38項目（友人と近づきたいという初期欲求を測定する１項目と近づきすぎたくない心性を測定する19項目、友人と離れたいという初期欲求を測定する１項目と離れすぎたくない心性を測定する17項目からなる）。下位尺度の構造を Figure 1 に示す。普段最もかかわりの多い同性の友人を想定してもらい、「非常によく感じる」から「まったく感じない」までの５件法で回答を求めた。

④ Rosenberg（1965）による自尊感情尺度（山本・松井・山成，1982による日本語版）の10項目。「あてはまる」から「あてはまらない」までの５件法で回答を求めた。

結果

年代別にみたヤマアラシ・ジレンマの発達的変化

近づきたいという初期欲求の平均値は4.32（SD＝0.72)、離れたいという初期欲求の平均値は2.74（SD＝1.21）であった。離れたいという初期欲求自体が生じにくいという傾向が示されたものの、本研究においては、初期欲求の程度にかかわらず、近づきすぎたくない・離れすぎたくないという心性をすべて組み合わせて全体像を測ることに焦点をあてて分析を行うこととし、初期欲求の得点が低い調査協

力者についても分析の対象に含めた。藤井（2001）での因子パターンにもとづき、近づきすぎたくない19項目のうち、自分が傷つくことの回避（以下、APP1とする）11項目、相手を傷つけることの回避（以下、APP2とする）8項目について下位尺度得点を求めた。同様に、離れすぎたくない17項目についても、自分が寂しい思いをすることの回避（以下、LEA1とする）9項目、相手に寂しい思いをさせることの回避（以下、LEA2とする）8項目について下位尺度得点を求めた。このヤマアラシ・ジレンマの下位尺度得点(4)×年代（3：30代・40代・50代）による2要因混合計画による分散分析を行った（Table 1）。

その結果、交互作用および年齢群の主効果は有意ではなく、ジレンマ得点の要因のみ主効果が有意であった。多重比較を行った結果、APP2＞LEA2＞LEA1＞APP1の順に得点が高かった。年齢にかかわらず、成人期女性の友人関係においては、APP2次いでLEA2という、他者を傷つけたり寂しい思いをさせたりすることを回避しようとするジレンマが生じやすく、LEA1やAPP1という、自分が傷ついたり寂しい思いをしたりすることを回避しようとするジレンマは生じにくいことが分かった。以上のように成人期内において、ヤマアラシ・ジレンマという心性には年代を指標とした発達的変化はみられなかった。

ヤマアラシ・ジレンマのパターン　ヤマアラシ・ジレンマのパターンを作成するために、ユークリッド距離を使用し、Word法による階層的クラスタ分析を行った。その結果、デンドログラムにより3クラスタを抽出することが妥当であると判断した。この3クラスタそれぞれのジレンマ得点のクラスタ別の平均値をFigure 2に示した。さらに、各ジレンマ得点についてクラスタ間の差を明らかにするため、一要因被験者間計画による分散分析を行った（Table 2）。

クラスタ1は、すべてのジレンマ得点が他の2つのクラスタよりも有意に高く、素点でみた場合もすべてが中央値の3点を超えていた。近づくことにも離れることにも自他を守るために強いジレンマを抱

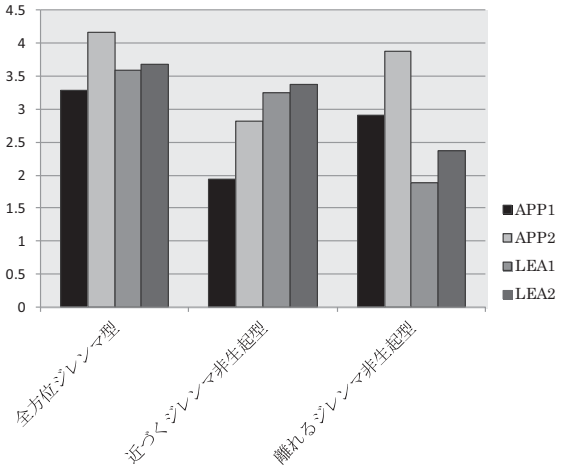

Figure 2　クラスタ別ジレンマ得点

Table 1　年代別にみたジレンマ得点の差異

	30代	40代	50代	交互作用	主効果	
					年齢群	ジレンマ得点
				df（6,615）		*df*（3,615）
APP1	2.69（0.11）	2.83（0.10）	2.73（0.10）	0.26	0.43	48.71***
APP2	3.58（0.12）	3.69（0.10）	3.69（0.10）			
LEA1	3.02（0.12）	3.11（0.11）	3.15（0.11）			
LEA2	3.31（0.10）	3.28（0.09）	3.29（0.09）			

***p ＜.001

Table 2　クラスタ間のジレンマ得点の差異

	クラスタ1（N=94）全方位ジレンマ群	クラスタ2（N=68）近づくジレンマ非生起群	クラスタ3（N=46）離れるジレンマ非生起群	F値 *df*(2,205)	多重比較
APP1	3.28（0.63）	1.94（0.61）	2.90（0.46）	102.34***	クラスタ1＞クラスタ3＞クラスタ2
APP2	4.16（0.43）	2.82（0.92）	3.88（0.58）	86.08***	クラスタ1＞クラスタ3＞クラスタ2
LEA1	3.58（0.71）	3.25（0.64）	1.89（0.54）	106.35***	クラスタ1＞クラスタ2＞クラスタ3
LEA2	3.68（0.59）	3.38（0.60）	2.36（0.62）	75.67***	クラスタ1＞クラスタ2＞クラスタ3

***p ＜.001

Table 3　クラスタ別にみた自尊感情得点の差異

	クラスタ1（N=94） 全方位ジレンマ群	クラスタ2（N=68） 近づくジレンマ非生起群	クラスタ3（N=46） 離れるジレンマ非生起群	F 値 df(2,197)	多重比較
自尊感情	31.37（5.82）	33.11（6.78）	34.69（7.81）	3.97*	離れるジレンマ非生起群＞全方位ジレンマ群

***p ＜.05

Table 4　クラスタ別の属性による度数

			クラスタ1（N=94） 全方位ジレンマ群	クラスタ2（N=68） 近づくジレンマ非生起群	クラスタ3（N=46） 離れるジレンマ非生起群	χ^2
調査協力者	子ども	有	84	61	41	0.01
		無	10	7	5	
	仕事	有	73	50	32	1.40
		無	20	18	14	
	生きがい	有	74	49	32	3.07
		無	16	17	14	
かかわりの多い友人	子ども	有	79	61	40	0.58
		無	11	6	6	
	仕事	有	70	51	29	3.63
		無	21	15	17	

える群であると解釈し、「全方位ジレンマ群」と命名した。

クラスタ２は、近づく場合のジレンマ（APP1とAPP2）が他の２つのクラスタに比べて最も得点が低く、離れる場合のジレンマ（LEA1と LEA2）の得点がやや高かった。近づく場合のジレンマが生じていないことが顕著な特徴である群と解釈し、「近づくジレンマ非生起群」と命名した。

クラスタ３は、素点でみた場合の平均値は３つの下位尺度得点（APP1，LEA1，LEA2）で３点を割っており、全体として比較的ジレンマが生じにくい特徴を持っていた。ただし相対的にみた場合、離れる場合のジレンマ（LEA1と LEA2）が他の２つのクラスタに比べて最も得点が低く、近づく場合のジレンマ（APP1と APP2）の得点がやや高かった。そこで、離れる場合のジレンマが生じていないことが顕著な特徴である群と解釈し、「離れるジレンマ非生起群」と命名した。

また、各クラスタの人数について χ^2 検定を行ったところ、有意な偏りがみられた（$\chi^2_{(2)}=16.66$，p ＜.05）。多重比較の結果、「全方位ジレンマ群」が「離れるジレンマ非生起群」に比べて有意に多いことが示された。

ヤマアラシ・ジレンマのクラスタの特徴　３つのクラスタの特徴を探るため、自尊感情の得点について、ジレンマ群(3)を要因とする一要因被験者間計画の分散分析を行った（Table 3）。その結果、「離れるジレンマ非生起群」の得点が「全方位ジレンマ群」よりも有意に自尊感情得点が高いことが明らかとなった。

また、調査協力者自身の個人属性、関わりの多い友人の属性について整理し、それぞれ χ^2 検定を行った。その結果、ほとんどの属性については群間の偏りがみられなかった（Table 4）。自分自身および友人に子どもがいるか否か、仕事をしているか否かなどによってジレンマの生起には影響がないことが明らかとなった。しかし、かかわりの多い友人としてママ友を選択した人数には有意な偏りがみられた（$\chi^2_{(2)}=13.15$，p ＜.01）。Table 5に示したように、「全方位ジレンマ群」は普段かかわりの多い友人としてママ友を選択した人数が有意に多く、ママ友以外（幼なじみ・学生時代からの友人・現在もしくはかつて職場が同じ・現在もしくはかつて家が近所・その他）を選択した人数は有意に少なかった。反対に、「近づくジレンマ非生起群」ではママ友を選択した人数が有意に少なく、ママ友以外の友人を選択した人数が有意に多かった。

Table 5　クラスタ別にみたママ友選択数

		全方位ジレンマ型	近づくジレンマ非生起型	離れるジレンマ非生起型
ママ友	観測度数	67	30	31
	期待度数	57.8	41.8	28.3
	調整済み残差	2.621**	-3.599**	0.925
ママ友以外	観測度数	27	38	15
	期待度数	36.2	26.2	17.7
	調整済み残差	-2.621**	3.599**	-0.925

**$p < .01$

考察

成人期女性の友人関係におけるヤマアラシ・ジレンマは、年代による発達的変化はみられず、その他の外的・内的要因によって生じる問題であると考えられた。ジレンマが生じるパターンとして、「全方位ジレンマ群」、「近づくジレンマ非生起群」、「離れるジレンマ非生起群」の3つのクラスタが抽出された。

すべてのジレンマ得点が高い「全方位ジレンマ群」は、今回の調査データの中で最も多くの割合を占めていた。成人期の女性の多くが、日常的な関わりの多い友人に対して、強いジレンマを抱えているといえるだろう。またこの群、ママ友と多くの関わりを持つ割合が多かった。子どもを介したママ友関係は、子ども同士の友人関係と母親同士の友人関係が並行な位置づけになることが多い。そのため、母親個人としては友人として選択しない（したくない）場合であっても、子ども同士の関係を維持させるために母親同士の良好な関係を構築・維持しなければならないなど義務的な色彩を帯びることがある。もっと踏み込んで親しくなりたい、あるいは息苦しさに耐えかねて距離を取りたいと思っても、それをすることで関係の崩壊や悪化を予測し、避けようとしてジレンマを生じていると考えられる。また、自尊感情が低いことから、友人からの評価に影響を受けがちであることが示唆される。

「近づくジレンマ非正規群」は、近づくことに対するジレンマの得点が3群の中でもっとも低かった。また、普段かかわりを多く持つのはママ友以外の友人であると回答した割合が多かった。子どもを介したママ友に固執せず、多様な関係性を持っている可能性が高い。そして、「友人」と呼べる相手を主体的に選択し、その相手に対して不安や葛藤を抱えることなしに単純に近づこうとすることが多いといえる。逆にいえば、近づいても傷つけあうことがない、あるいは傷つけあうことへの不安が少ない相手を主体的に選択しているのだとも考えられる。

「離れるジレンマ非正規群」は、全体としてジレンマが生じにくいが、なかでも相手と離れることに対するジレンマの得点が3群の中でもっとも低かった。また、3群の中で自尊感情がもっとも高かった。相手と離れることに対するジレンマが生じにくい群は、自らに対して価値あるものと高く評価し、相手との関係に縛られたりしがみついたりすることが少ない特徴をもつといえるだろう。

以上3つの群については、調査対象者自身および友人の属性である子どもや仕事の有無などでは偏りがなかった。ジレンマを抱えるのは、単純に子どもがいるかいないかということではなく、普段の生活でその子どもを介した友人関係とのかかわりに比重を置いているかどうかが鍵であると考えられる。また、個人の持つ自尊感情の高さとジレンマの生じにくさの関連が示され、自尊感情の得点の程度によって、影響を受けることが示唆された。

本研究では、日々関わることの多い友人との間で生じるヤマアラシ・ジレンマを通して、成人期の女性特有の友人関係を明らかにした。しかし、因果関係が明らかになったわけではないため、今後は関連要因を精査し、因果モデルの検証を行う必要があるだろう。

謝辞

本研究を行うに当たり、調査にご協力くださった協力者の方々に、深く感謝申し上げます。

付記

本研究の一部は、2012年6月に行われた日本教育心理学会第54回総会、2016年3月に行われた関西学院大学教育学会において発表した。

引用文献

荒牧美佐子・無藤　隆（2008）. 幼稚園入園前後における母親の育児感情と「ママ友」との関係性　日本発達心理学会第19回発表論文集，611.

Ausubel, D.P.（1954）. *Theory and problems of adolescent development*. Grune & Stratton.

Blieszner, R.（1994）. Close relationships over time. In L. A. Weber & J. H. Harvey（Eds.）, *Perspectives on close relationship*. Massachusetts: Allyn and Bacon.

Erikson, E.H.（1959）. Identity and the life cycle. *Psychological Issue*, No. 1, Monograph 1.（小此木啓吾他訳（1973）. 自我同一性　精神書房）

藤井恭子（2001）. 青年期の友人関係における山アラシ・ジレンマの分析　教育心理学研究，49，146-155.

GouldR. L.（1978）. *Transformation*. New York: Simon & Schuster.

岩永　誠（1991）. 友人・異性との関係　岩泉信人・南博文(編)　人生周期の中の青年心理学　北大路書房

Jacobs, E.（1965）. Death and the mid-life crisis. *International Journal of Psychoanalysis*, 46, 502-514.

實川慎子・砂上史子（2009）. 子育て期の母親同士の人間関係の特質―母親の自己における「個としての自分」と「親役割を担う自分」に注目して　日本保育学会第62回大会発表論文集，327.

Jung, C. G.（1933）. The stages of life. In *The collected works of Carl G. Jung*, Vol. 8. Princeton, NJ: Princeton University Press. 1980.

栗原　彬（1989）. やさしさの存在証明：若者と制度のインターフェイス　新曜社

Levinson, D. J., Darrow, C., Kline, E., Levinson, M., & Mckee, B.（1978）. *The seasons of a man's life*. New York: Alfred A. Knopf.

松岡弥玲（2006）. 理想自己の生涯発達―意味の変化と調節過程を捉える―　教育心理学研究，54，45-54.

宮木由貴子（2004）.「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割―ケータイ・メール・インターネットが展開する新しい関係　ライフデザインレポート，159，4-15.

中尾達馬・原田有紀（2010）. 育児中の母親だけが経験する特異的な人間関係（ママ友関係）の諸特徴―ママ友の数、子どもの数に焦点を当てて―　日本教育心理学会総会発表論文集(52)，480.

岡田　努（1995）. 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察　教育心理学研究，34(4)，354-363.

大平　健（1995）. やさしさの精神病理　岩波書店

千石　保（1985）. 現代若者論：ポスト・モラトリアムへの模索　弘文堂

Shopenhauer, A.（1851）. *Pererga und Paralipomena: kleine philosophische Schriften*. Zweirer Band.（秋山英夫訳（1973）. 比喩、たとえ話、寓話　ショーペンハウアー全集14　白水社）

上野行良・上瀬由美子・松井　豊・福富　護（1994）. 青年期の交友関係における同調と心理的距離　教育心理学研究，42，21-28.

Vaillant, G.E.（1977）. *Adaptation to life*. Boston: Little Brown.

若本純子・無藤　隆（2004）. 中年期の多次元的自己概念における発達的特徴―自己に対する関心と評価の交互作用という観点から―　教育心理学研究，52，382-391.

Waterman, A.S.（1993）. Developmental perspective on identity formation: From adolescence to adulthood. In J.E.Marcia., A.S. Waterman., D.R. Matterson., S.L. Archer., & J.L. Orlofsky.（Eds）, *Ego identity: A handbook for psychological research*. New York: Springer-Verlag.

Whitbourne, S.K.（2002）. The aging individual physical and psychological perspectives（2nd ed.）New York: Springer Publishing.